

「変わらぬものと変わるもの」

～高知での公衆衛生学会自由集会から～

高知市保健所

所長 豊田 誠

令和となって初めての公衆衛生学会自由集会が、10月23日に高知で開催されました。私は座長を務めさせていただきましたが、自分が20年前の大分の自由集会で「中学校結核集団感染事例」を報告し、多くの励ましの言葉をいただいたことを思い出し、感慨深いものがありました。

参加者は102名でしたが、発表やディスカッションに熱心に耳を傾ける会場には、人数以上の熱気があり、この自由集会参加者の結核対策にかける思いは変わらないと感じました。

小樽市保健所長の貞本晃一先生からは、医療機関で発生した結核集団感染事例の報告がありました。感染源患者の発見前に、接触者からの複数の発病者があったのですが、保健所の対策責任者が不在であり、「手引き」に無い判断を下すのは困難な状況でした。結果として大規模な集団感染となってしまう、対応した職員に大きな負担がかかった事例でした。医療機関で発生した結核集団感染対応を考える上では、教訓的な事例であると感じました。また、結核研究所の支援が入り、結核集団感染対策委員会が設置されてからは、適切な対応がとられており、外部の専門家の協力を得ながら、組織として対応することの重要性をあらためて感じました。

台東保健所の水田渉子先生からは、日本語学校での結核集団感染事例の報告がありました。初発患者の発見が1月下旬で、3月卒業までに可能な検査を終了し方針決定が必要となるタイトなスケジュールの中、IGRA、VNTRの結果が迅速に集計、分析され、池に石方式で第2・3同心円にも適切に接触者健診が拡大されていました。また、環境調査も怠りなく、母国語による支援や、多岐にわたる進学・就職先への情報提供、転居後の自治体の結果集約など、集団感染への総合的で見事な対応を報告していただきました。対応を聞きながら、検査技術の進歩だけでなく、情報収集

や支援など、外国人への結核対策はここまで変わったということ、教えていただいた発表でした。

香川県東讃保健福祉事務所の鹿庭淳子先生からは、外国人技能実習生の集団感染事例の報告がありました。初発患者の入国前後の健診受診が発見につながっておらず、講習や寮で長時間の接触者が把握され、その対応は複数の保健所にまたがっていました。そのような状況の中、関係機関との連携をとりながら接触者健診を企画、実施し、健診対象者や発見された患者には、言葉や文化の違いをできる限りうめながら、支援につとめられていました。このような事例は、日本のどこの地域でも起こる可能性があり、その対応を考える上では、東讃保健福祉事務所の真摯な取り組みは、とても参考になるものでした。

自由集会の最後に、結核研究所の加藤所長から、「結核罹患率は減少しても集団感染の発生件数は変わっていない。日本で結核集団感染対応の経験則を共有するには、この自由集会が貴重な機会となっている。この自由集会には、世界の結核対策に発信できる貴重な経験則が蓄積されていて、世界の結核対策に役立っている」という力強いメッセージをいただきました。この自由集会が、結核対策従事者にとって貴重な情報共有の場として、これからも変わらず続くことを願っています。🐼



自由集会会場の様子